



私たち夫婦には子どもが恵まれず、病院にも通いましたが、それでもできなかったので40歳になり夫婦で話し合いました。妻は1人ぐらい子育てをしたいといい、また私も子どもが好きでしたので、児童相談所へ相談に行きました。その際、里親制度があることを知りました。さっそく申し込み、翌平成2年の3月に登録されました。こうして、私たち夫婦は特別養子縁組里親になりました。

里親になってもすぐに子どもの話はきませんでしたので、妻は乳児院で赤ちゃんのお世話の実習に参加をしました。その何ヶ月後、児童相談所より実習に通っていた乳児院に縁組候補の子どもがいるとのお話がありました。

それから、マッチング（子どもと里親との関係作り）のため、私も乳児院の研修に参加しましたが、私達夫婦にその子どもは全くなついてくれませんでした。でも、辛抱強く乳児院に通い、子どもと接していくうちになつてくれるようになりました。

数ヶ月後、いよいよ自宅で子どもを預かることになりました。最初は緊張して妻にしがみついたまま離れようとしませんでした。時間が経つにつれて緊張もほぐれ、私と一緒に風呂に入るくらい打ち解けることができました。

それからしばらくして、近所の方たちを我が家に招きお披露目パーティーをしました。私の娘と紹介し、これからよろしくと皆さんにお話ししました。ありがたいことに人形などのプレゼントをいただきました。

預かって1年半を過ぎた頃に、家庭裁判所の手続きを経て私たちは親子になりました。私は娘に、出自について嘘はつきたくないと思っていました。嘘をつけばずっと続けなければならない、お互いに気持ちが通じなくなる気がしたからです。もし、本人が出自のことで悩み苦しんでも、一緒に悩んでいこうと考えていました。話をしたのは娘が小学校に入学した頃でした。入浴中、娘が「私はどうやって生まれたの?」と聞いてきたので、「いよいよ話さなくては。」と思い、「生まれたときの様子は、実はわからない。神様のお陰で、子どもが出来ない私達のためによそで産まれて、巡り巡って我が家の子どもとして来たんだよ。」と話しました。納得したのかしなかったのかよくわかりませんでした。しかし、同じ質問をその後何度も受けたので、納得できなかったのかと思いました。中学になった頃、どこで生まれたのかと聞くので、「〇〇市だよ。」と答えました。詳しく調べたいなら一緒に行ってもいいよと話しました。2度ほど聞かれたのですが、その後は、そのことについて何も話しませんでした。

それから、中学、高校と進み反抗期には妻との喧嘩が激しく、時には「本当の親でもないくせに!」と言うこともあり。大学にも行き保育士の免許を取る勉強をしましたが、残念ながら中途退学しました。その時ようやく気が付きました。娘は自己否定をしていたのです。「どこかで捨てられた自分」という思いがあり、自分を肯定できなかったのだと思います。やはり告知の後のフォローは必要なんだと思いました。

娘は3年前に結婚し、子どもが生まれました。私にとってかわいい孫娘です。出産した病院の助産師さんとのご縁で、知人の新聞記者さんが、娘が置かれていた病院を捜してくれました。すぐにその病院を一緒に訪問し、院長や看護士さんから話を聞きました。娘は、「病院に置きざりにされた後も皆さんから大切に育てていただいた。自分は捨てられたのではない。産みの母親が、生きてほしいと思うからこそ産婦人科病院に置いてくれたのだ。」と感じたのでしょうか。これを機にずいぶん落ち着きました。我が子を産んだ直後でもあり、生きてほしいという母親の気持ちが理解できたのかもかもしれません。

この経験から、出自というものは人間形成にとって、大変重要なことだと強く感じました。今はもう大丈夫と感じています。これからも見守ってまいります。

